

気象庁、気象研究所で担当する。気象庁で、すでに開発されたものを、気象研究所で改良を行ないつつある。常圧において、センサーを検定出来る検定装置は開発中である。AMTEX では十分信頼できる観測資料が得られることが期待される。

(iv) 日射ゾンデによる短波長放射の flux 測定

気象研究所が担当する。これは現在、気象研究所で開発中である。この測定で、日射による大気加熱の垂直分布、地表面大気の反射率等が測定され、またエアロゾルの吸収特性等が評価できる。

(v) ネフエロメータゾンデによる大気の光学的特性の測定

気象研究所が担当する。現在気象研究所で開発中である。この測定で、大気の Phase function, 減衰係数, エアロゾルの粒径分布の垂直分布等が評価できる。

なお、余力があれば、次の項目の観測もおこなう。

(vi) オゾン・ゾンデおよび Dobson's Ozone-spectrometer によるオゾン量およびその垂直分布の観測

(vii) ブイによる日照時間の観測

これらの観測資料の有効な利用のためには多くの理論的研究が併行しておこなわれることが必要であるが、これに関して我が国の放射研究者は十分な能力を備えているが、かなり大きな計算が必要となるので、そのための経済的な Support が必要である。

〔書籍紹介〕

島 貫 陸 著 数理情報科学

——データの理解からコンピュータへ——

(A 5 版, 200ページ, 900円, 1971年1月, オーム社)

本書は気象学の教科書ではないが、著者が気象学会の一員であることは決して偶然ではない。情報科学という分野は、コンピューターの発達普及ともなって発展してきたが、科学技術におけるコンピューターの利用という点で、気象学は最初からその先進を行き、豊富な経験をつんできた。

本書にのべられていることは、著者もまえがきで述べているように、大部分がコンピューター以前のことがらであり、またコンピューターに直接関係ない人にも役立つことがらである。それがいま強調されてきたのはなぜだろうか。

計算、分類といった情報処理が目まぐるしく数字をみながら手作業でなされていた時代には、そのめんどろな作業をやりつつ、データの扱い方ある程度経験的に理解してきた。ところがコンピューターの普及は、

情報処理を従来とは比較にならないほど迅速にしたし、手作業時代の経験をしばしば無用のものにした。しかし、手作業による情報処理から解放されたかわりに、コンピューターやその附属施設の操作とか、プログラムかきにおわれるようになってしまい、オペレーターの養成とかプログラム言語の教育はさかんになったけれども、コンピューターを利用する立場からのデータについての基礎教育がたちおくれた。

そういう日本の現状に挑戦してかかれたのが本書である。本書にはのべられていないが、気象学が地球物理学の一分野というせまいわくからぬけ出し、気象界のもつ豊富な経験を生かして、情報科学分野にもっと貢献していく必要がある。というのが著者の日ごろの主張である。このような出版物が気象界から続々出ることを期待したい。(丸山健人：気象研究所)